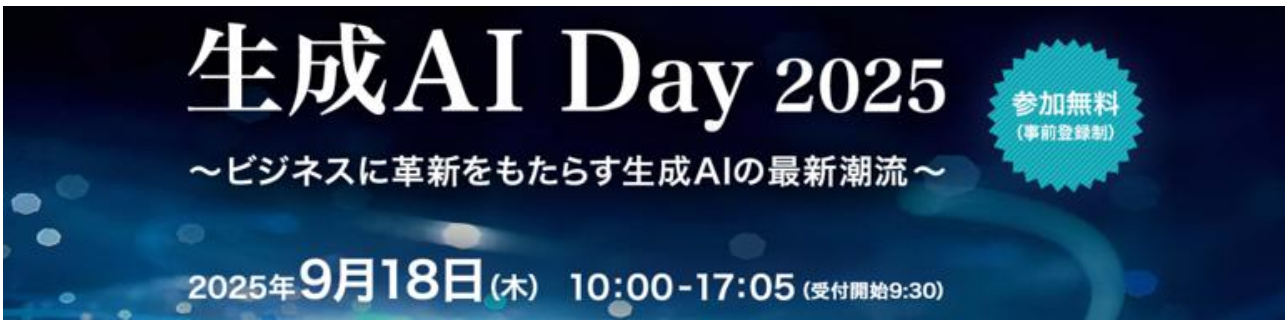

【開催概要】

【～ビジネスに革新をもたらす生成ＡＩの最新潮流～】をテーマに9月18日 紀尾井カンファレンスを会場に合計18のセミナー＆セッションが開催された。

【セミナー1　10：00-10：40】
【演題　生成ＡＩを用いた学術研究の最前線】
【講師　東京大学　山崎 俊彦 氏】

【概要】

生成ＡＩは学術界にも革新をもたらし、従来の難題を解決する例も現れている。
本セッションでは、生成ＡＩを活用した新たな研究手法や産学連携の事例が紹介された。

【講演内容】

魅力工学に生成ＡＩを活用している。ビッグマルチメディアデータを用いて、魅力の定式化に挑んでいる。手法的には多軸評価手法を取り、魅力を数値化して、解析、説明、評価につなぐ。
端的に言えば、匠の技を追求し、その技で二匹目のどじょうを狙うのが目的。
深層学習がキーで、それによって生成ＡＩが発展してきた。GPT5は賢く、『分からない』と答えるようになった。これは進歩だ。【これまでは分からなくてももっともらしい回答をした。】
簡単にいえば、深層学習以前は人間が特徴を見つけた。今はプログラム自身で特徴を見つける。
昔のＡＩは微視的な解析に優れている。今のＡＩは巨視的に見る能力に長けている。
学術部門ではどんな風に生成ＡＩを利用しているか？　一般論ではなく自分の例ではあるが

①　ダメ出し。議論の漏れがないか。
②　スケジュール管理
③　数式の証明。回答作成。統計的優位性の検証。

何とかアートの感性をＡＩに持たせたいと考えている。

【結論】

ＡＩは道具。ただし、道具を使いこなすのは大変だ。道具を使いこなすには素養が必要。
生成ＡＩがでてきてからは人間は以前に増して、学びが必要になってきた。
【生成ＡＩはできる人が楽になるツールではあるが、できない人ができるようになるツールではない。】
できる人にまずならないといけない。

【感想】

まあ、身もふたもない結論だが、正論には違いない。

【セミナー2　10：40-11：10】
【演題　属人化解消に挑む！
KDDI様が実現した『実務で使える』生成ＡＩチャットシステム開発】
【講師　アイレット（株）　川村 彰 氏】

【概要】
KDDIは、属人化した知識の共有を目的に、生成ＡＩを活用した社内チャットシステムを導入した。アイレットとの協業による現場密着型ＡＩ開発の成果と今後の展望を紹介する。

【講演内容】
会社の発展が、ナレッジの属人化で止まっていないか？　生成ＡＩ の活用が情報収集だけに終わっていないか？　今後の企業の発展にはこれが肝になる。**ナレッジを共有化することが肝。**
生成ＡＩはアシスタント。改良は泥臭く、地味な作業の連続。生成ＡＩ＝解決ではない。

【まとめ】
華々しい解決策はない。
泥臭い検証と改善のサイクルを継続する。
実務に根差したＡＩ活用が鍵。
ＡＩ Agentは業務のあらゆるシーンに活用可能だ。リサーチAgent。アナリストAgent。etc

【感想】
最後は自社の製品・技術のPRになったが、機能を分けてAgent毎に生成ＡＩを使えと言う主張。ＡＩの活用が行き詰っているという現状認識からの提案。

【セミナー3　11：25-12：05】
【演題　JTCでも最新技術に追従しよう！
ＡＩ エージェント構築のトレンド解説と事例紹介】
【講師　KDDIアジャイル開発センター　御田 稔 氏】

【概要】
ＡＩ技術の急速な進化に対し、エンタープライズ企業がどう適応すべきかを、ＡＩエージェントの最新トレンドと大企業でも新技術を円滑に導入するための実践的なノウハウを共有する。

【講演内容】
LLMをテキスト文章生成ツールではなく、思考のツールとして使う。⇐上手く使うための工夫。
エージェントの統合機能を使い
ユーザからのフィードバック⇒学習機能で学習⇒**プロンプトへの組み込み⇒回答の生成に繋ぐ。**
MCP：ＡＩエージェント用のツール接続規格　エージェント2エージェントのプロトコル規格
マルチエージェントで複雑なタスクを分割し、更にRAGを活用して、回答精度をあげる。
Amazon Bedrock AgentCore：AgentCore は、エージェントをより効果的かつ有能にするためのツールと機能、エージェントを安全に拡張するための専用のインフラストラクチャ、信頼できるエージェントを運用するためのコントロールを提供する。

【成功の鉄則】
ベンダーに丸投げしない。小さく始めてPoCは内製化する。開発パートナーは内製化のコーチとして使う。ステークホルダーの根回しは早めに済ませる。
チャットボットはUXである。何をするのか決めてから作らないと決して動かない。
【感想】
ベンダーに丸投げしないとは？ できるくらいならやっているというユーザが多いのでは？

【セミナー4　12：20-12：50】
【演題　活用が進むＡＩエージェントの展望と構築のポイント】
【講師　BIPROGY（株）森脇 浩志 氏　　EAGLYS（株） 今林 広樹 氏】

【概要】
BIPROGYとEAGLYSによる最新事例を通じて、ＡＩエージェントが業務代行を実現するためのポイントと成功の鍵を紹介する。
業務を支援するＡＩの未来像と具体的な活用方法が明らかになる。
【講演内容】
LLMの言語能力は　文書生成　文書変換　推論　Mモーダル処理　など。
最新のGPT oシリーズを使うと、生成ＡＩを組み合わせて使える。
ナレッジの分散を生成ＡＩが統合する。つまり
オーケストレータＡＩ⇒タスク分割⇒スペシャリストＡＩ+…+共通モジュール+データ整備
【感想】
このような主旨に沿った、Agentの組合せが製品化されているが、ＡＩエージェントは必要か？

【セミナー5　13：05-13：45】
【演題　エンジニアは今も必要なのか？
リアル現場の生成ＡＩ最前線LT会　Presented by 生成ＡＩ EXPO】
【講師　Givin' Back 田中 悠介 氏　Shunkan AI （株）神谷 亮平 氏
Studio Veco 伊藤 雅康 氏　IKIGAI lab.　髙橋 和馬 氏　】

【概要】
文系人材による生成ＡＩ活用の最前線を、個人・スタートアップ・大企業の3事例で紹介する。
IKIGＡＩ Lab.のメンバーが司会を務め、ＡＩ時代の開発と組織定着のリアルを掘り下げる。
【講演内容】
【伊藤さん】VIBE CORDING ERA＝話し言葉でコーディングができる時代。
（　打ち合わせ中にプレゼンのプロトができる。VIBE CORDINGの実演。）
たった一つのプロンプトで3DのVideo プレゼンが完成する。10年の計画プランが2週間で完成できる。**専門技術が無くても、アイディアがあれば、 すべての人がクリエータになる時代が来る。**
ＡＩを使えば、夢はかなう。事業は伸ばせる。
【神谷さん】この変化の激しいＡＩ時代の生存戦略はＡＩへの適応だ。
7万行のソフトを113人月から2人月に短縮できる。ＡＩで50倍早くできる。

【５０倍開発の成功要因。】
開発メンバーを少人数にして、コミュニケーションをシンプル化すること。そのために生成ＡＩを使う。よくある問題はコミュニケーション。開発人数が少なければ、ゴールも見えやすい。
非生産時間が短縮され、効率が上がる。⇦生成ＡＩに作業をさせ、効率を上げる。
では、技術者は生き残れるのか？
対処方法**・設計、デザイン、納入　全部ひとりでやります宣言**をする。**そうすれば生き残れる。**
世の中は待たない。できるなら早くやれ。
【高橋さん】
生成ＡＩに悩む理由はSaaSと違う。使い方の勘所がつかめない。従来と同じ方法ではうまくいかない。GPTｓ：個性的なＡＩを作れる機能。**プロンプトが書ければ使える。**
生成ＡＩ を使える人材。革新をおこせる人材。これが今後重要になる。
生成ＡＩを浸透させるには、まずプライベートで使う。その後に組織的に活用する。
【感想】
現段階で、すべての識者の意見は同じように思える。つまり、**生成ＡＩは易しいツールではない。**
しかし、使いこなせるようになれば、強力な助っ人になる。
何故なら、ゴールを描ける人ならば、デザイン、開発、納入、保守まで一人でできるツールであり、コミュニケーションが不要だから、効率は良い。

【セミナー6　14：00-14：30　】
【演題　生成ＡＩの精度を高めるデータ作成/収集の正しいアプローチとは】
【講師　FastLabel（株）　小林 広紀 氏】
【概要】
生成ＡＩ開発に不可欠な高品質データの収集・整理手法と権利問題への対応について解説する。
音声・画像・RAG向けデータなど、ＡＩ精度向上を支援する具体的なサービスも紹介される。
【講演内容】
生成ＡＩの開発はデータ作成が８０％。**アルゴリズム開発よりはデータ作成に時間がかかる。**
非エンジニアによるデータのアノテーション作業が開発のメイン作業になっている。
LLMを固定して、データを変えるのとアルゴリズムを変えてどれだけ性能が向上するのかを比較をするとアルゴリズム　76.2%⇒76.5%　　データ　76.2%⇒93.1%　データの制度が圧倒的に重要になる。データの精度＝アノテーションの精度。
学習データは専門性の高いデータが必要　例えば　コボル関係の用語、金融関係の用語など。
非言語データのアノテーションが今後の生成ＡＩ発展にはとても重要。つまり人手で構造化をしてやる必要がある。言語データを組み込むためには、不明な指示語を明確な単語に置き替えるなどの作業が必要。今後の自動運転などには、VLM画像キャプショニングの技術やマルチモーダルRAGが必要になってくる。
【感想】
まあ、まっとうなプレゼンであるが、VLMの人海戦術についてサラッと流されたのは残念。
発展途上国の人たちは、相当過酷な作業を強いられている。その結果のデータセットと言う事を忘れてはなるまい。

【セミナー7　14：45-15：25】
【演題　AI-CoEの活動とCX領域での生成ＡＩによるナレッジ活用の取組み】
【講師　JCOM（株） 鎌田 幹生 氏】

【概要】
JCOMグループはＡＩ推進専門組織を設立し、全社的な業務改革とナレッジ活用を生成ＡＩで加速している。マーケティングやコンテンツ生成などの実践事例と、導入過程で見えてきた課題・展望を紹介する。

【講演内容】
生成ＡＩの活用方針
積極的に推進する+自律的に推進する　この二つが相まって、初めて成長する
推進のアプローチ
・個人ベース　＝　生産性の向上
・業務ベース　＝　プロセスの構造改革
・サービスのDX
生成ＡＩを使ったシンボル的な機能成長　AS ISから TO BEへ変化することが目標。
生成ＡＩ によるナレッジの活用
・新たなナレッジの生成
・ナレッジの整理
・生成ナレッジによる業務no高度化

【課題と展望】
・ハルシネーション？と言うよりも生成ＡＩの揺らぎに対して一貫性の担保が課題。
・セキュリティガバナンス
・ROIの追求

【感想】
生成ＡＩ活用の一つの事例。

【セミナー8　15：40-16：10】
【演題　ＡＩ抜きのDXはもう無理】
人手不足の現場を救うシリコンバレー式ＡＩ活用を解説
【講師　MODE, Inc.　道間 健太郎 氏】

【概要】
ゼネコン・高速道路・鉄道などの現場で活用されるBizStackの事例を通じて、ＡＩ×IoTによる業務効率化と安全性向上の手法を紹介する。人手不足を背景に、シリコンバレー式ＡＩ活用術と導入のポイントを解説し、次世代現場づくりの最前線ノウハウを共有する。

【講演内容】
2050年　3500万人の労働人口の減少。生産性を約2倍にする必要がある。
ベテランの大量退職。ＡＩ-Driven IoT
DXではシステムが乱立。プラットフォームが現場でつかわれない。

【BizStack AssistantのPR資料】
建設中の作業現場で異常が発生した際には、BizStack Assistantが自動的に報告し、現場監督を

サポートします。 一般的なチャットボットと違い、BizStack Assistantは設定されたアラート機能によって異常を判断できます。そのため、緊急時にはBizStack Assistantから現場監督に報告を行います。 会話は自然な言葉でスムーズに行われるため、現場でAIとストレスなくコミュニケーションを取ることができます。

IoT×生成AIアシスタント BizStack Assistant｜MODE, Inc.

【感想】

会社の製品PRとして、ありがちなプレゼンでした。

【セミナー9　16：25-17：05】
【演題　生成ＡＩによるソフトウェア開発の革命が始まる。】
ＡＩ駆動開発の最前線と今後の開発スタイル＆エンジニアの役割は？
【講師　クリエーションライン （株）荒井 康宏氏】

【概要】

生成ＡＩによるソフトウェア開発のパラダイムシフトを背景に、「ＡＩ駆動開発」の最新動向とそのインパクトを紹介する。今後求められる開発スタイルの変化や、エンジニアの役割・必要スキルの予測にも焦点を当てる。

【講演内容】

ＡＩ駆動開発：システム開発プロセスをＡＩと相談しながらすすめる。駆動開発ツールは235種もある。

グーグルでは　2024.10時点で　25％　2025.6 時点で　95％以上をＡＩによってソフトを開発。

ＡＩ駆動開発フェーズ

要件定義　⇒　設計書　⇒実装計画　各フェーズをＡＩが実行して、人間が確認作業を行う。

ここまでの生産性は大幅にアップするが、残りの2割の確認作業に8割の時間がかかる。

それでもトータルの効率は1.5倍から2.0倍の速さになる。

生成ＡＩではシステム全体を一貫して作るよりも、プラグイン的な部分開発が得意。

社内システム、検証システムには使えるが、**基幹システム、クリティカルなシステムにはまだ使えない。**

今後のエンジニアの役割はソースコードを作るより、検証、最後のチェックをする仕事になる。

エンジニアはＡＩの恩恵を受けるため、今からＡＩに取り組め。【ＡＩ READY！】

【感想】

プログラマ受難の時代になりました。なんとセールスフォースでは新たなプログラマを今後は雇わないそうです。数理能力より言語能力が重視される時代になりました。

最後に荒井氏のブログの記事を参考に掲載します。今後、職業としてのプログラマにはなかなか刺激的な内容ではないでしょうか。

【エンジニアに求められるスキルとは】
今回は「AI駆動開発」について駆け足で見てきました。**これからのエンジニアに求められるのは、単純なコーディングのスキル・経験ではなく、要件に合わせたAIツールの組み合わせなどを決定するパイプラインや、最も有効となるプロンプトを作成できる専門家になるためのスキルです。**加えて目まぐるしく変化するテクノロジーに素早く追従する必要もあるため、現時点での固定的な知識だけでなく、新しい技術やトレンドを素早く取り入れられる柔軟な姿勢も求められてきます。
AIで対応できる仕事が人の手から奪われていくことで「自分の仕事がなくなってしまうのでは」という懸念をお持ちの方、特にエンジニアの方もいらっしゃるかも知れませんが、今回紹介したように一緒くたにエンジニアが不要になるのではなく、役割が大きく変化するということになるでしょう。
その意味では「AI Ready」なエンジニアを目指すことが、現状で最も有効な判断となるのではないかと思います。しかし、裏返せばこの変化についていけないエンジニアは、その存在意義が次第に希薄になっていく可能性もあります。
ＡＩ駆動開発で変わる開発スタイル：ＡＩ駆動開発概要とツールの紹介、求められるスキルとは｜Think IT（シンクイット）

以上